

沖縄と仏教 ～伝来から衰退まで～

田仲 みなみ

(丸田 博之ゼミ)

目次

第1章 沖縄の信仰と仏教の伝来

- (1) 沖縄の信仰の始まり
- (2) 御嶽信仰
- (3) 仏教の伝来
- (4) 琉球王国の主な寺院

第2章 仏教と琉球王国

- (1) 国家仏教としての仏教
- (2) 民衆との関係
- (3) 琉球の集落との関係

第3章 仏教の衰退

第4章 仏教が衰退していく中で伝わったもの

第1章 沖縄の信仰と仏教の伝来

(1) 沖縄の信仰の始まり

沖縄の信仰の始まりは、紀元前時代の狩猟や漁業を行っていた時代から焼畑耕作を経て水田耕作時代へ移る過程の中で、自然と形成された。

長い貝塚時代のあと、琉球列島にも農作物の栽培方法や上質の焼物をつくる技術が伝わった。この農耕を主体とした生産経済の時代をグスク時代という。農耕社会は定住を前提として、収穫した食料の備蓄を可能にするため、人びとの生活もしだいに安定し、人口も急速に増加していった。

それまでは家族単位で少数での生活を営んでいたが、鉄器が入り、農耕が伝わり始めるとその周りに集落をつくり暮らすようになった。

集落発生の当初は、貧富や階級の差もゆるやかで、血族集団の主家(根屋)の長がムラびとをたばねていた。しかし農耕生活が定着すると、集落内だけでなく、集落間の協力、提携が必要になり、大きな地縁集団をつくりだしていった。

集落の拡大は、より強力な指導者をうみだすことになり、貧富の差や階級がうまれた。

13世紀には、近隣の集落同士の利害が対立するようになり、有力な地域の首長が他の集落を統合していった。

こうして誕生した支配者のことを按司という。按司は、城塞として強固なグスクを築き、勢力を拡大して小国家を形成するようになった。

14世紀になると、各地にいた按司たちが争いによって領土を広げ3つの国に統合された。この時代を三山時代という。

三山とは、沖縄本島を3つに分けた内の南部の南山、中部の中山、北部の北山、3つの国のことで、この三山それぞれが明に朝貢し、交流する時代が約百年間続いた。

その後、三山の中から中山の尚氏が勢力をもち、北山、南山を次々に統一し1つの国「琉球王国」が誕生した。

琉球王国建国以前、紀元前の狩猟・漁撈の時代から焼畑耕作を経て水田耕作の時代へ移る過程で次第に形成されてきたのが、マキョとよばれる集落であった。

そのマキョでは、女性が祭を行なって神のこたばを聞き、それに基づいて男性が政治を行なうといった、いわば祭政一致のマツリゴトが行われていた。⁽¹⁾

祭政一致がとられていた理由としては、沖縄の信仰が関わっている。

沖縄には古代から、女性は男性に比べてセジ(灵力)が高いとされ、神霊と交流できる神秘的な力をもち、その力をもってオナリ(姉妹)がエケリ(兄弟)を守護することで家族を守るという信仰があった。⁽¹⁾

そのため、女性が祭を行ない神の言葉を聞き、男性がそれに基づいて政治を行なうといった祭政一致がとられていた。

つまり、マキョの人々は、自分たちの集落のそ

ばの森に先祖の霊をまつり、根神などの口を通して先祖の託宣を聞き、また祭ごとに先祖のセジをいただきながら、その神の意志に添って自己の生命が安泰に展開していくことを祈った。

(2) 御嶽信仰

この祭政一致に関わる祭祀が行われていた場所を「御嶽」と呼ぶ。

「御嶽」とは、森や御願所、グスクなどと呼ばれる聖地の総称。ちなみに森とは、土や石、あるいは木樹が生い茂る、高く盛り上がった地形のことをいう。

御嶽内部のもっとも神聖な場所には、「イビ」という霊石が祀られる。

そこには神霊がよりつき、その前には香炉が設置されている。

沖縄においては、祭祀は女性が司るもので、かつては男性が御嶽に足を踏み入れることもできなかった。⁽²⁾

また木々に神の霊魂が宿ると考えられていたため、ガジュマルやクバナなど木々の茂る場所に多く存在していた。

琉球王国時代においても、その信仰は変わらず、神事を司るのは女性とされ、祭政一致の政策がとられていた。

また琉球王府時代、御嶽はもっぱらノロ(神女)と呼ばれる女性神官によって祀られ、航海安全、五穀豊穰、雨乞いなどの祈願や祭祀が行われてきた。

いくたびかの戦火により、沖縄のほとんどのグスクが破壊され廃墟化した、

御嶽は各地に残り、地元の人々やユタ(霊能力者)に守られ、自然そのものを崇めるという沖縄独特の信仰文化を物語る場となっている。⁽³⁾

昔々、天城に阿摩美久という神がおられた。天帝が阿摩美久を召しだして仰せになるには、

「この下に、神が住むべき霊地がある。だが、未だに島と成っていないので、口惜しいことだ。そなたは天降りして島を作りなさい」

と下知された。

阿摩美久はかしこまって降臨したところ、霊地には見えたが、東の海の波は西の海を越え、西の

海の波は東の海に越えて、いまだに島には成っていないかった。

それで、阿摩美久は天へ上り、

「土石や草木を給われれば、島を作り奉ります」

と奏した。天帝は御感じあって土石や草木を給わったので、

阿摩美久は土石と草木を持って降り数々の島を作った。

まず、一番に国頭に辺戸の安須森、次に今帰仁のカナヒヤブ、次に知念森、斎場御嶽、藪薩の浦原、次に玉城アマツツ、次に久高コバウ森、次に首里森、真玉森、次に島々国々の嶽々森々を作った。⁽⁴⁾

尚質王の命により羽地朝秀が編纂した琉球王国の『中山世鑑』には御嶽が琉球王国にとって祭政一致を行なう場所として、存在していたことがわかる。

御嶽の中でも最も格式高く、琉球王国の重要な祭祀が行われていたのが、斎場御嶽である。

斎場御嶽

琉球王朝時代、最高の聖地とされ、祖神アマミク神が作った七御嶽の1つと伝えられている。

東方久高島への遥拝所でもあり、国王の参詣や、聞得大君の即位儀礼である御新下り(オアラオリ)も行われた。

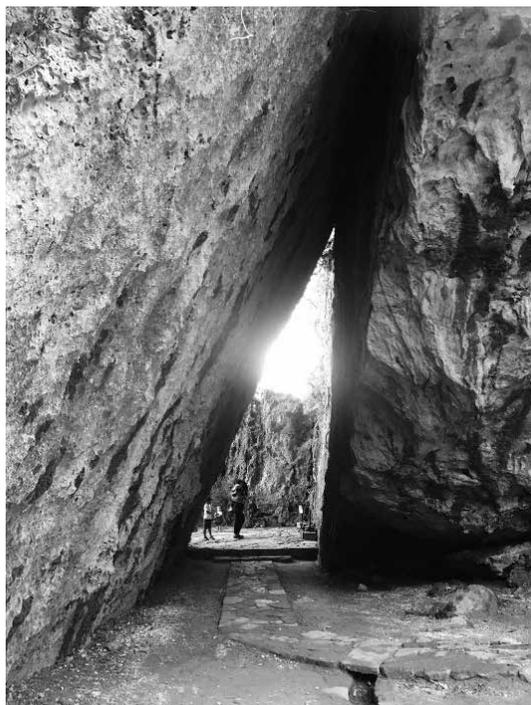
知念村久手堅のサヤハ原にある御嶽で、方言ではセーフアウトキとよんでいる。

『おもろさうし』では「さやはたけ」、『中山世鑑』では「斎場嶽」、『琉球国由来記』では、「サイハイノ嶽」などと記されている。

- 一 さやはたけ みちやけ
 糸よ 糸 やれ おせ
 又 そこにやたけ みちやけ
 又 さんこおり あつる
 又 さんみやあしやげ あつる
 又 よきのいろのつまぐる
 又 ましらよきやのつまぐる
 又 金きやぐら よりかけ
 又 なむぢやきやぐら よりかけ
 又 玉しりぎや よりかけ
 又 玉くみぎや よりかけ

又 ておのいと まはるび
 又 大きみのめしよわちへ
 又 くにもりぎや めしよわちへ
 又 よなはばま おれわちへ
 又 ばてんはま おれわちへ
 又 浦まわり めしよわちへ
 又 さきまわり めしよわちへ
 又 あがるいに あよみわ
 又 てだがあなに あよみわ

(5)



御嶽内には、キョウノハナ、三庫裡（サンコウリ）、寄満（ヨリミチ）、大庫裡（オオコウリ）とよばれる拝所があるが、首里王城内にはそれらと同名の御殿や広間もあり、首里の王府や王権との深いかわりをもたらされていることがわかる。

セーファはセすなわちセズ、霊力の豊かに満ちている場所（パ・ファ・ハ）という意味。

三庫裡

三庫裡は、2つの巨岩が寄りかかってできた三角形の割れめようの所をくぐりぬけて達する狭い空間である。

三方は岩に囲まれ、東方が開かれていて久高島への遥拝所になっている。その岩壁の頂上にキョウノハナ（拝所）があり、アマミク神はそのクバ（蒲葵・ビロウ）の木を伝って香炉の所へ降臨すると信じられている。

(3) 仏教の伝来

琉球王国への仏教伝来は、咸淳年間（1265-74）、禅鑑という僧侶が渡来し、英祖王の命で浦添城の西に極楽寺を営んだのが始まりとされている。

附、感淳年間。王命_二輔臣_一。建_二寺于浦添城之西_一。名曰_二極樂_一。

先_レ是一僧。名_二禪鑑_一。不_レ知_二何處人_一。駕_レ舟飄_二至那覇_一。

王命_二構_二精舎于浦添_一。名_二極樂寺_一。令_二禪鑑禪師居_二焉_一。

是我國佛僧之始也。⁽⁶⁾



『中山世鑑』には、「何処の人かは知らぬが禪鑑という僧の乗った舟が那覇に漂着し、英祖王は浦添城の西に極楽寺を建立し禪鑑を居住させた。」と記されていて、『琉球国由来記』にも

飄然到_レ小那覇津_一。俗不_レ稱_二其名_一。只言_二補陀洛僧_一也。蓋朝鮮人歟。

且扶桑人歟。世遠。詳無_レ考也。

王聞_下於_二其道德_一重_上。而詔召_レ之。始見_二圓方袍儀相_一。而大悦_レ之也。

本有_二夙縁_一乎。勅_二建精舎於浦添城西_一。

而居_レ於_レ斯。號言_二補陀洛山極樂寺_一也。是我朝。佛種萌芽。⁽⁷⁾

『中山世鑑』とほとんど内容的には同じように記されている。

ただし、『琉球国由来記』は、禪鑑みずからが補陀洛僧と名乗っていること、英祖王建立の寺を補陀洛山極樂寺と号したことを記しており、このことから禪鑑は熊野から渡海した補陀洛僧ではなかったかと推測する。⁽⁸⁾

また、『琉球国由来記』の中の「天徳山龍福寺記」で

伝聞、昔 英祖王踐祚時、咸淳年間、從_二異域_一、有_二梵侶航_レ海來_一。

俗不_レ稱_二其名_一、唯言_二補陀洛僧_一也。王始見_レ之重_レ之、營_二精舎於浦添城西_一、号_二極樂寺_一、延以居_レ於焉_一。是我朝、梵侶・仏宇之始也。⁽⁹⁾

「英祖王の時、咸淳年間（1265～74）、異域より僧侶が航海してやってきた。俗にその名を称さず、ただ補陀洛僧と言った。王は初めてこれにまみえて重んじ、寺院を浦添城の西に営み、極樂寺と号し、延請してここに住まわせた。これは我が朝（琉球国）の梵侶（僧）・仏宇（寺院）の始めである。」と記され、龍福寺の前身が極樂寺であった旨のことが記されている。

極樂寺はその後荒廃したが、龍福寺と寺名を改め、浦添原の地に移転した。

しかしその後、島津による琉球侵略により、龍福寺は焼失してしまう。

同廿五日の早天に運天の港を諸軍勢の船と同く出て、酉の時、大湾渡口に漕着。兵船は皆纜をとる。西来院同時出船して其夜の寅の刻斗に真比港に着ぬ。

（中略）卯月一日末の刻斗、敵那覇の津に入る。大将は湾より陸地を被越、浦添の城并龍福治焼払ふ。⁽¹⁰⁾

その後、尚寧王（位 1589～1620）は龍福寺を再建して、旧制に復した。

尚寧王又修、而頗復_二旧制_一也。⁽¹¹⁾

その後、沖縄は南山・中山・北山の三山による統一時代が百年間にわたって続いた。そして15世紀になり尚氏によって三山が統一され、第一尚氏王朝が成立する。

尚巴志による琉球統一期には土利と称される寺院があった。尚泰久王の時代には治世下に、天界寺、建善寺など多くの寺院が建立された。

第二尚氏王統時代になると、天王寺、円覚寺が建立され、国家仏教としての体裁が整えられ、絶頂期を迎えた。

(4) 主な寺院

当時建立された主な寺院をまとめてみる。

○龍福寺 宗派…臨済宗

成化年間（1465-87）に尚円王は、浦添城の北側に移転させ、天徳山龍福寺とした。

龍福寺の方丈の中央には舜天王・舜馬順熙・義本王・英祖王・大成王・英慈王・玉城王・西威王・察度王・武寧王・思紹王・尚巴志王・歴代王叔・歴代先妃・先遠宗親、第一尚氏王統以前の歴代国王の大硯屏が安置されていた。尚巴志王以降の歴代国王の硯屏は龍福寺には安置されておらず、国廟たる崇元寺にのみ安置されていた。

○護国寺 宗派…真言宗

14世紀後葉（察度王代）に、本土から来た頼重和尚によって創建され、国王代々の鎮護国家の祈願所であった。

歴代の王は即位すると、諸臣を護国寺に集め、誓いの水を飲ませた。

沖縄で2番目に建てられた寺で、戦後再建されたとはいえ、継続する最も古い寺である。また、沖縄の真言宗の本寺であった。



○慈恩寺 宗派…禅宗

「歴代の王は慈恩寺を国廟としていたが、その廟は王城（首里城）に極めて近くであった」（中山世譜）とあり、第一尚氏王統の王家の国廟として建立された。

○大安寺 宗派…禅宗

1430年（尚巴志王九）明国の使者柴山が琉球に滞在している時に「暴風から奇跡的生還したことを感謝して建立した寺院」と言われているが、どこにあったかははっきりしない。

一説によると、明人によって創建された禅宗のお寺で、当時、大安寺と明国の諸寺とは親密な間柄であったとされる。

○長寿寺 宗派…臨済宗のちに真言宗

「お伊勢の寺」とも称されていたという。第一尚氏王統の王相「壊機」が冊封使を迎えるための長虹堤を建設する際に、靈験があったということから天照大神の勧請とともに建立された。

○安国寺 宗派…臨済宗

尚泰久王が父王の冥福を祈るため創建。

1454～60年ごろ、尚泰久王が父王の冥福と国

家安泰のために設けた。当時は久場下村にあったが、老朽化したので、1674年現在地、首里寒川町に移転し、不動尊殿も新設された。梵鐘（1457年銘）が安国寺に掛けられ、毎月28日には高官らが国王万歳の祈願をした。王府の調書保管所でもあった。



○遍照寺（旧 万寿寺） 宗派…真言宗

末吉寺に登る入り口左側にあった寺で、1763年の改号までは「万寿寺」と呼ばれていた。末吉寺に並置された真言宗で、俗に「末吉の寺」と呼ばれていた。

玉城朝薫作の組踊「執心鐘入」の舞台となった場所である。寺には1457年（尚泰久四）に铸造された梵鐘があり、これが組踊の題材になったとされている。

現在寺跡は、一部石垣や礎石、香炉が残るのみである。



沖縄と仏教 ～伝来から衰退まで～

○神宮寺 宗派…真言宗

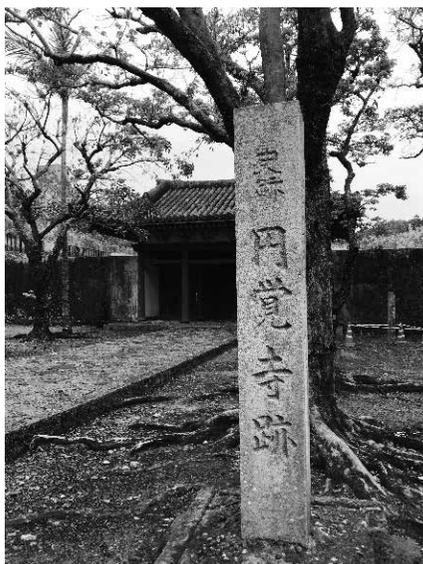
普天間宮の別当寺で、唯一、本島中部に位置する。普天間神宮寺縁起に、「当山は1459年に尚泰久王の勅願によって住民の祈願所として建立されました。史実は定かではありませんが、当時は首里から中部地方の視察の際に、お休み所がこの普天間にあり徐々に整備され、尚泰久王の勅願により開山となりました」と記されている。



○旧円覚寺 宗派…臨済宗

沖縄第一の名刹であり、沖縄における臨済禅宗の総本山であったが、沖縄戦で壊滅。昭和43年に総門と放生橋が復元された。

創建は、尚真王が父・尚円王を祀るためで、1494年に完工。第二尚氏王統の菩提寺（先祖位牌を祀り、供養を営む寺）であった。



○聖現寺 宗派…臨済宗のちに真言宗

奄美諸島や伊平屋島・久米島の貢納船が泊港に入り、泊倉に貢物を収納した。

天久宮を1734年に聖現寺境内に移建。寺は欧米人の宿泊所にされた。

寺社の敷地は2300坪で、現在の泊高校敷地に聖現寺があった。



○首里観音堂 宗派…臨済宗

正式の寺号は慈眼院という。万歳嶺とよぶ丘にあって視界が開け、海が臨める。

渡航無事を祈願する寺として上り口説に「旅ぬ出立て、観音堂、千手観音伏し拝でい…」と謡われる。また、十八夜拝み（旧暦1・5・9月）には各地から善男善女が訪れる。

首里観音堂の創建縁起は、佐敷王子（のち尚豊王）が人質として薩摩に連れていかれた際、父尚久が息子が帰国できたら観音堂を建てると誓願した。無事帰郷したので1618年、万歳嶺の中腹に観音堂を建て、つぎに万歳嶺の南に慈眼院を建立。1645年から国王が毎年参詣するようになった。



○臨海寺 宗派…真言宗

臨海寺はもと三重城にいたる堤道の中途にあった。「沖ぬ寺」と愛称され、航海の安全祈願はみなこの寺へ参詣した。

1611年に薩摩から帰還した尚寧王は、臨海寺に謝恩を祈った。

釣鐘には1459年の銘があるので、尚泰久王代かそれ以前の創建であろう。1538年ごろ日秀上人が漂着してきて最初に臨海寺に泊まった。



○西来寺 宗教…臨済宗山号は達磨峰なので、達磨寺と愛称されている。西来とは達磨大師が西天から中国に来られたという意味と、阿弥陀仏が

西方浄土から迎えに来るという意味がある。

開山の菊陰宗意は円覚寺18世を継ぎ、1597年「浦添城の前の碑」を撰文。1600年ごろ山川村に千手院を建てて隠居していたが、薩摩の侵入で和平交渉を行ったり、尚寧王の薩摩連行の際には付き従った。その功で国相となり、上儀保村の再来院を賜った。

明治中葉に15世の片岡柏庵が金城村から現在地、首里赤田町に移建した。



○袋中寺 宗派…浄土宗

福島県岩城出身の浄土宗の僧侶・袋中は中国渡航を果たせず、1603年（52歳）沖縄に渡った。

尚寧王は師と仰ぎ、桂林寺を建てて住持させた。

袋中は滞在わずか3か年で帰国したが、短期間では弟子の育成、僧の資格は得られず、後継のないまま寺は壊滅。阿弥陀三尊像は聖現寺が保管し、のち大典寺に移ったが沖縄戦で焼失した。

昭和12年、袋中の法統を復興するため垣花町に袋中寺を建立したが、昭和19年空襲で焼失。昭和50年小禄に再建された。



第2章 仏教と琉球王国

たくさんの寺院が存在していた琉球王国だが、そのほとんどが現在では廃寺となっている。

また仏教も一般の人々には普及、定着することはほとんどなかった。

なぜ仏教は琉球で普及・定着しなかったのだろうか。その理由を大きく3つに分け、考えてみる。

(1) 国家仏教としての仏教

沖縄の仏教は、琉球王家との結びつきが強く、第一尚氏六代尚泰久王は「仏法の明君」、第二尚氏の三代尚真王は「仏心天子」と称されるほど、国家が仏教を保護してきた。

仏教はあくまで国家仏教にすぎなかったのである。

これについては、当時の文献を見てみても国家が仏教を保護し、取り入れていることがわかる。

彼岸

春秋彼岸半ニ、禪家召_レ寄於御書院_ニ、齋ヲ賜。

此七日ノ間、世俗、寺ニ至リ、仏ニ共シ、僧ニ嚫ス。又、僧・法師等、読経・法談ヲナス。⁽¹²⁾

三月三日此時、夜御番人員、賜ニ艾餅一也。年浴・柴差・鬼餅、效_レ之

当国内裏、從_レ大台所_ニ御佳例御盆壺通御飯、及造_レ艾餅_ニ、進_レ献于御内原_ニ。且桃花酒、自_レ円覚寺_ニ献_レ之、古礼也。為_レ始世代未_レ詳。⁽¹³⁾

七月七夕行幸

七夕、行_レ幸於円覚寺・天王寺・天界寺・大美御殿_ニ、為_レ(_次)先王御拜_レ也。始_レ於何之御宇_ニ乎、不_レ可_レ考矣此三箇寺行尚真聖主、円覚禪寺有二御建立一以来、毎年盂蘭盆前、御幸者、神拜有_レ之歟。於_レ二大美御殿一、供奉之官員、賜ニ索麩一ナリ。⁽¹⁴⁾

御施餓鬼之事

毎年七月十三日、於_レ円覚寺・天王寺・天界寺_ニ、御生靈御迎也。十四日、於_レ円覚寺_ニ行_レ之也長老・西堂・経衆、都合四十八人。古例者、於_レ方丈之庭_ニ、向_レ御照堂_ニ、設_レ棚二飾_ニ、施_レ之也。

於_レ天王寺_ニ、七月十四日・十五日、両日施行、

旧例也。

於_レ天界寺_ニ、七月十四日施_レ行之_レ也。⁽¹⁵⁾

忌日

先王・先妃、於_レ円覚寺・天王寺・天界寺_ニ月忌ハ、行_レ仏家之祭礼_ニ也。忌日、御香・御花・御五水、当職使也。其日、御神酒壺宛、公朝王子衆、廻合奠_レ之也。月忌、御香・御花・御五水、花当使也。⁽¹⁶⁾

普天間御参詣

尚賢王御宇、順治元年甲申九月始也。還幸之時、龍福寺_(次)先王神主、御香・御花・御酒祭奠、行_レ拜礼_ニ也。或説、九者、老陽者反月也。然則厄月故、詣_レ干遠近仏神_ニ、祈_レ無病息災_ニ。⁽¹⁷⁾

「玉城之公事」(琉球国由来記)によると、五節句・春秋の彼岸・施餓鬼・王家の仏事などは臨濟僧が、社参・御祈禱・御参詣・普天間御参詣・城内御タウグラの竈清めなどは、真言僧が取り行っていたことがわかる。⁽¹⁸⁾

しかし、琉球王府が受容した仏教に期待されたのは主として鎮護国家であり、「後生」「仏壇」などの仏教用語が民間で使用されている状況はみられるが、仏教が民間に広く普及し強い影響をおよぼすにはいたらなかった。

(2) 民衆との関係

当時の寺院の多くが、首里・那覇に存在し、民衆にとって遠い存在であった。

なぜ首里・那覇に多く存在していたのか。その理由は琉球王国の貿易事情が大きく関係していると考えられる。

琉球王国では明をはじめとして、朝鮮半島や日本など東南アジアの国々との貿易の中間地点として重要な役割を果たしていた。

14世紀、明の治安悪化によって琉球王国が日本と明のメインルートとなる。その中継地点として、良港だった那覇に華人や日本人など対外勢力の居留地が自然発生的につくられた。

琉球の現地権力は、那覇の対外勢力を外交・交易活動に利用し、首里とともに那覇は琉球王国の重要拠点となっていった。

その後、首里へと居城を移し、政治、経済、文



化、外交の中心となる首里城を築いた。
首里城にある万国津梁の鐘には、

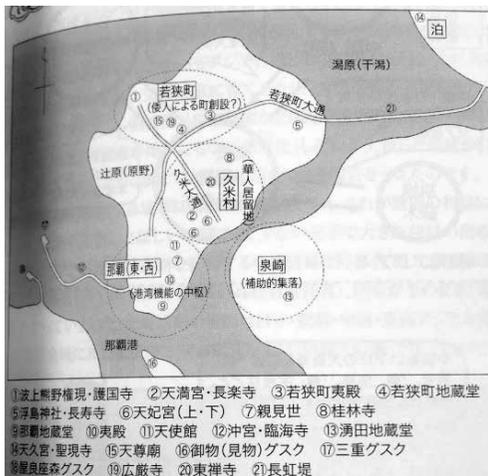
琉球国は南海の勝地にして三韓（朝鮮）の秀を
鐘め、大明（中国）を以て輔車となし、

日域（日本）をもって唇齒となす。此の二中間
に在りて湧出するの蓬萊島なり。

舟楫を以て万国の津梁となす。異産至宝、十方
利に充満せり。⁽¹⁹⁾

とあり、琉球王国が中国、朝鮮、日本など東南
アジアと広く貿易を行なっていて、貿易によって
栄えていたと記している。

当時の那覇は浮島になっていて、約1キロの海
中道路で沖縄本島とつながっていた。



浮島内には久米村をはじめとした居留地、王府
の交易施設である親見世や御物グスク・中国冊封
使の宿泊する天使館、対外勢力によってもたらさ
れた神社や寺院、天妃宮など異国の宗教施設が並
んでいた。

図①

『おもろさうし』巻一三に、

一 しより おわる てだこが
うきしまは げらへて
たう なばん よりやう などはまり
又 ぐすく おわる てだこが

「王宮に君臨する太陽子（てだこ）＝国王が、
浮島（那覇）を造営して、唐・南蛮の船々の寄
集う那覇の港、首里城に君臨する太陽子が」⁽²⁰⁾
との意味で記されていて、那覇が琉球対外交易の
センターであったと考えることができる。

そのため首里、那覇が貿易の重要拠点となり、
そこに多く存在していた寺院は、外国へ渡航する
ときの安全祈願や、琉球に漂着した人のための宿
として使われていた。

このように、たくさんの寺院が建立されていた
が、その場所は首里、那覇にほぼ限定され、その
利用も仏教が琉球国家との結びつきを重要視して
いたため、民衆には仏教が普及されなかったと考
えることができる。

(3) 沖縄の集落との関係

沖縄の村落では、沖縄社会の歴史的発展に伴って醸成されてきた固有信仰—民族宗教があり、それ故に村落社会の共同体宗教として有効に機能し、これによって、村落構成員は精神的に強固に結合されていた。⁽²¹⁾

当時の琉球の人々にとって、仏教伝来以前からの共同体宗教としての民族宗教が、村落社会の中核として存在し、村落社会と切りはなすことのできない大切な存在であったと言える。

人々と村落社会は密接に関わり、他の村落との社会的交流もほとんどなく、そのため、村落の外にでる機会もめったになかった。

婚姻形態は必然的に親同志が相手を決めることになった。そのほとんどが部落内婚であった為に親戚同志の婚姻も多く、特に又イトコ同志からの婚姻はほとんど意に介さなかった。

財産の多い家などでは、血のつながりのある家の娘を迎えたいという気持ちがあった。伝承としては他部落へ嫁ぐ娘は軽蔑されたり、⁽²²⁾ 部落の女が、ひそかに他部落の青年と遊んでいるのがみつかり、大罪とされ罰を加えられ、罰金を払わされた。

たまに部落外との婚姻があると、それは、部落内の人々からいい目ではみられなかった。⁽²³⁾

白保以外の他部落の男の人と交際している白保の女の人「評判」になるのが早かった。大正の頃までは、部落内の者どうしの結婚がほとんどであった。

他部落へ嫁いでいくのは、部落内でもらい手がないからだと言われたり、サンゴナー（尻軽る女）であると悪く言われたりした。他部落の青年が白保に出入りすると、白保の青年たちがいたずらをしたり、ときにはけんかをして追い出したという。

隣の宮良部落は、豊年祭（アカマタ）へのよそ者の参加を許さないという関係から、嫁いでいく者もわりと少なかったという。⁽²⁴⁾

このように村落内で結婚することが一般であったため、村落から出る機会ほとんどなかったが、村落の外に出る唯一の理由が存在する。それが身売りである。

しかし、身売りでも首里、那覇、泊には禁止な

ど制限が厳しく制限されていたため、村落の外に出ても他の村落の様子などを詳しく知ることはできなかった。

首里王府通達の『法式』（1697年）には、

一 諸百姓之儀上納方并諸知行諸地頭作得不足之砌致借物利平大分成立身売之訴訟申出候右体二而ハ漸々百姓少間切中之疲罷成儀候公義よ里諸事見合茂有之儀候処右之段畢竟常々油断故与存候脳々入念百姓何とそ有付候様可致下知候乍此上借物申さて不叶節者地頭江申出委細差引之上地頭次書両惣地頭裏書二而可為借物候若内証二借渡候ハ、借損可為候兎角身売申さて不叶儀候ハ、員数少内以見合間切中江可売渡候首里那覇泊江者前々よ里法度申付置候弥相守候

とあって、困窮による身売りのことが規定されているが、その身売り先は間切内に制限されており、首里・那覇・泊への身売りは厳禁であった。⁽²⁵⁾ このようにほとんどの農民は、村落から出て生活をする人がなく、行動範囲が王府によって決められていたため、村落間での社会的交流が行なわれなかった。

また沖縄方言で「シマ」とは、島を意味するだけでなく、村落の意味を持つ言葉である。

沖縄の空間概念では「シマ」は、行政で区分された村落や集落と同じ概念ではない。社会的にも宗教的にも一つの集団単位として、人々が生きる空間に近い概念といえる。

かつてのシマに生活する人々は、地縁・血縁で結びついた集団がほとんどで、共同意識も強く、人々が話す方言もシマごとに微妙に違っている。

また、近代までシマの内婚は習慣化され、極めて閉鎖的な婚姻形態の特徴があった。

「シマ」空間は、それぞれ村立の物語を伝え、祖先神や超自然神に関連した聖域を有してそれぞれの世界観を持っていた。⁽²⁶⁾

これは、農民にとって村落こそが世界そのものであり、自己の存立基盤であったことを意味している。村落の再生産が不可欠で、そのために共同体的結合が必要とされた。その村落社会の共同体的結合の機能や共同体秩序・規範としての役割を

果たしているのが固有宗教—民族宗教であったから、農民の日常生活における価値体系あるいは宗教意識や宗教的世界観も、当然、民族宗教にもとづいていた。⁽²⁷⁾

民族宗教は極めて呪術的であったが、村落社会の共同体秩序・規範としての役割を果たすなど、村落社会とは不可分の関係にあった。そのため、仏教は村落社会に定着しなかったと考えられる。

第3章 仏教の衰退

村落社会に定着しなかった仏教は、琉球王府の保護によって存在できていた。

そんな仏教がなぜ沖縄から衰退していったのかは、薩摩による琉球侵攻、日本の歴史背景が大きく関係している。

琉球侵略とは、1609年に薩摩の島津氏が大軍を送って琉球を征服した事件である。

当時の日本は、豊臣秀吉が天下を統一した頃であった。豊臣秀吉は明朝を倒してアジアを征服することを企んでいた。結果として失敗に終わり、明との国交は途絶えてしまうが、琉球は薩摩の島津氏を通じて圧力が加えられ、一方的に服属国になってしまう。

徳川の時代になると、途絶えていた明との国交を回復するため、琉球に仲介をさせようと徳川家康は考えていた。

ちょうどその頃、琉球船が日本に漂着する。漂着民を保護した徳川家康は、そのお礼として琉球に明との講和と貿易の再開を仲介させようとするが、琉球は日本の従属下に入ることを意味するとも言えるこの要求を拒否した。

島津氏は尚寧王に対し、家康から出兵の許可を得て、日明貿易の復活と斡旋するように求めたがこれに対しても琉球は応じなかった。

慶長十四己酉年四月上旬、前征夷大將軍従一位右大臣源家康公薩摩大隅日向三ヶ國の大守嶋津兵庫頭従三位宰相源義弘を為召嚴命有りて宣ふハ、抑日本國中の外嶋々多く有る中に日本近き嶋國共に大半帰伏たる処に汝が領國近所の琉球國ハ、元

朝鮮の下知に随ひし所に近来彼國にも伏せず勿論日本にも伏せず、然るに今天下閑暇の時節なり、汝が領國の諸士手を空敷して有らんも且ハ武道のはげみにもたいませんか、彼國ハ汝が領國に近しと聞、日本の武威を輝し且ハ島津家の名誉とも成共上帰伏するに及んでハ、國ハ富兵威を添へ子孫のき本とならん。彼國ハ武勇の國にも然とも異國三國の争ひの節、諸渴孔明か南蠻を征伐せしむる謀をもつて機に望んで変に應し、進退度に当り人数を損せしめず智勇を以彼國を勢しめよ⁽²⁸⁾

これに乗じて島津氏が琉球侵攻を願い出て、1609年琉球を侵略した。

一六〇九年の四月一日、王城の大手道、綾城大道を甲冑や鎧などで武装した兵たちが進軍してきた。薩摩兵である。彼らは守礼門までくると行軍をやめ、左右の柱から縦に二列縦隊で並び立った。

隊列はこの先の中山門まで続いている。守礼門から中山門までざっと四百メートルほどある。おびただしい数の軍勢が首里城足下を埋めていたといつてよい。

他国の軍隊が首里城にここまで迫ったのは史上、初めてのことである。⁽²⁹⁾

今帰仁に薩摩軍が入っただけで、那覇の人々はどうもろたえ、大混乱に陥っているさまがわかる。⁽³⁰⁾

戦意のうすかった琉球に対して、幾多の戦闘を経験し鉄砲で武装された薩摩勢は強力であり、戦さはあっけなくケリがつき、琉球側は無条件降伏を強いられた。⁽³¹⁾

薩摩は琉球侵攻に成功し、琉球に対し掟15か条を出す。

この掟によって琉球王国は、完全に薩摩の支配下となっていく。

掟15か条の内容は次のようになっている。

- 一 薩摩が命じた場合をのぞいて唐へ誂え物することを禁ずる（「薩摩御下知の外、唐江誂え物停止せらる可きの事」）。
- 一 住古より由緒ある人たりといえども、当時御用に立たない人に知行を遣わしてはなら

ない（「住古従り由緒之れ有る人たりといふ共、當時御用に立たざる人ニ知行遣わされ間敷きの事」）。

- 一 女房衆へ知行を遣わしてはならない（「女房衆江知行遣わされ間敷きの事」）。
- 一 私の主を頼むべからざること（「私の主を頼む可からざるの事」）。
- 一 諸寺家を多く建ておかないこと（「諸寺家多く建て置く間敷きの事」）。
- 一 薩州の御判形（印判）の無い商人を受け容れてはならない（「薩州従り御判形之れ無き商人許容有る可からざる事」）。
- 一 琉球人を買取り、日本へ売渡してはならない（「琉球人買取り、日本江渡す間敷きの事」）。
- 一 年貢そのほかの公物は、日本の奉行が定めた法令に従って収納のこと（「年貢其の外の公物、此の中日本の奉行置目の如く収納致さる可きの事」）。
- 一 三司官を闇いて別人につくことを禁ずる（「三司官を闇き別人に就くは停止為る可きの事」）。
- 一 押し売り・押し買いを禁ずる（「押し売り・押し買い停止為る可きの事」）。
- 一 喧嘩口論を禁ずる（「喧嘩口論停止せしむ可きの事」）。
- 一 町人・百姓等に定められた諸役のほか、無理非道のことを申しかける人があれば、薩州鹿児島府に報告すること（「町人百姓等ニ定め置かる諸役の外、無理非道の儀申し懸る人あらは、薩州鹿児島府に披露致さる可きの事」）。
- 一 琉球国より他国へ商船を遣わすことは一切してはならない（「琉球従り他国江商船一切遣わされ間敷きの事」）。
- 一 日本の京判櫛のほかこれを用いてはならない（「日本の京判櫛の外用う可からざるの事」）。
- 一 博打・悪事をなしてはならない（「博奕僻事有る間敷きの事」）。⁽³²⁾

琉球側の交易・通商権の統制で、島津家以外から詭え物を受け取ること、島津氏の渡航許可証を

持たない者を許容すること、他国へ商船を派遣することを禁止した。

また、由緒ある家柄、あるいは女房衆への知行宛行いの禁止、新たな寺院の建立を制限し、琉球王国の知行宛行いの制限、王臣間で私的主従関係を形成することを禁止した。

島津氏は琉球に対し、これまで強く求めてきた対琉球交易権の排他的独占や、王臣たちが王府権力の外に新たに主従関係を形成し、島津氏に対する抵抗勢力に成長することを防いだ。

掟によって、貿易を制限されたため経済的にも不安定になっただけでなく、寺院の建立も制限されたために、これまで利用されていた寺院に対して経済的な支援ができなくなってしまう。

また、宗門改めも行われ、琉球では浄土真宗もその対象となった。代表的な民衆仏教である浄土真宗の禁制も、地方村落から仏教を遠ざける原因となった。

仏教も制限されたことで、琉球から仏教そのものが衰退していったと考えることができる。

第4章 仏教が衰退していく中で 伝わったもの

国家仏教として存在し、一般の人々には普及しなかった仏教は、琉球侵攻で衰退していった。しかしその中には例外もあった。

本国、念仏者、万暦年間^(天)尚寧王世代、袋中ト云僧浄土宗、日本人。琉球神道記之作者ナリ渡来シテ、仏経文句ヲ俗ニヤハラゲテ、始テ那覇ノ人民ニ伝フ。是念仏ノ始也。⁽³⁴⁾

それが尚寧王代の1603年、渡唐を目的として琉球に渡ってきた袋中上人が伝えたと言われる浄土宗であり、後に「エイサー」として伝わっていくものである。

袋中上人は、琉球に3年滞在し、京都へ戻ったが、その教えはニンブチャー（念仏者）たちによって伝えられた。

ニンブチャーは、中世的な遊行宗教芸人の典型で、首里の郊外アンニヤ村（安仁屋村。行脚村。

現在首里久場川町の一部)に住み、葬儀や法事があれば頼まれて鉦を打ち、念仏歌を歌い、ときには経文も読んだ。僧のいないところでは、その代わりも務めたという。⁽³⁵⁾

また、彼らが伝えた念仏歌は、盆踊り歌として伝わり、浄土宗の教えを忠実に信仰・布教するというよりも、葬儀に招かれて訃音通知の鉦を叩き、念仏あるいは念仏歌を唱えて死者を供養し、葬儀に欠かせない存在として念仏を伝えていたのである。地方村落でもニンブチャーは葬儀に際しては不可欠の存在として認識されていた。葬儀の習俗として沖縄の宗教社会に定着したのである。⁽³⁶⁾

ニンブチャーが行っていた内容の一部が、袋中上人の伝えた浄土念仏に共通するものがあったため、民衆にも伝わっていったと考えられる。

1663年、琉球王府は仏教の民衆への布教を制限するため、僧侶の説教禁止を打ち出した。僧侶による布教ができなかった時代、その役目を担ったのがニンブチャーであった。各地の葬儀や法事で、念仏歌を通して仏教行事や教えを広めた。

そんなニンブチャーの活動も次第に衰退し、昭和初期には消滅してしまう。

しかし、袋中上人の伝えた浄土宗は、沖縄独自の民俗芸能と混ざり、現在にも伝わるものとなったものがある。

それはエイサーと呼ばれ、旧暦のお盆の最終日「ウークイ(お送り)」の日に行われる先祖供養を目的にした念仏踊りとして、広く民衆へと広まっていた。

エイサーの呼称は、念仏歌の断手「エイサーエイサーヒヤルガエイサーアスリサーサーアスリ」に由来し、袋中上人が伝えた念仏踊りと混ざり、誕生した。

「きょう、桂林寺の上棟式で聞いたエイサーの掛け声ですが、儀間親方に聞きましたところ、この琉球には古くから『えさおもしろ』という労働歌があるということでした。これから作る垣ノ花の念佛歌は、エイサーの掛け声を入れた歌にして『えさおもしろ』の節にのせてみたいのです。」

彼等は作業をしながら、楽しそうに「えさおもしろ」と思える労働歌をうたいつづけていた。

八・八調か八・六調の歌の後には、必ず「エイサ エイサ サーサ エイサ」の掛け声が入っている。そこには桂林寺の上棟式での掛け声とは違った、美しい力強さがある。この掛け声に聞きほれて作業の手を休めていた上人の頭の中に、ひらめくものがあった。

上人は「垣ノ花エイサー」の第一作目は、村の女たちだけによって踊られる、円陣演舞(白太鼓)でも歌えるような歌詞にしようと考えた。そして題名を「継子念佛」と書くと、一気に筆を走らせた。

「継子念佛」

南無阿弥陀仏や阿弥陀仏
三つの年には 母は逝き
エイサ エイサ サーサ エイサ
五つの年には 母恋し
エイサ エイサ サーサ エイサ
七つの年には 母尋ね
エイサ エイサ サーサ エイサ
村々さまざま 巡れども
エイサ エイサ サーサ エイサ
我が母の姿 いずこにや
エイサ エイサ サーサ エイサ

儀間親方の老妻が「継子念佛」を、美しい余韻を残して歌い終わると、親方は満足そうに大きくうなずいた。

「結構なお謡でございます。垣ノ花の念佛歌として、これから大事に伝えてゆきとうございます。次の白太鼓にご披露できますよう、早速、女衆で稽古に入らせていただきます。」

白太鼓とは御嶽の祭りや豊年祈願祭のあと、神女だけによって踊られる円陣舞踊である。

「このように立派な女エイサーを作っていたら、男衆も黙っていないでしょうな。いかがでございますでしょうか。」

儀間親方はご満悦の面持ちで、上人に問いかけた。「愚僧も誠に嬉しうございます。さて、男衆のエイサーですが岩城のジャンガラを考えますと、

《継子念佛》より、少し乙張のあるほうがよからうと考えましたので、」

と言いながら、上人は儀間親方に一紙片を差し出した。それには大和言葉で次のような歌詞が書かれていた。

「親の御菩提（死後の幸せ）」
 南無阿弥陀仏や阿弥陀仏
 親の御菩提を祈らぬ子は
 挿木を植えても すぐ枯れる
 エイサ エイサ サーサ エイサ
 親の御菩提を祈る子は
 挿木を植えると すぐに芽を出す
 エイサ エイサ サーサ エイサ
 親の御菩提を祈らぬ子は
 井戸を掘っても 水は出ぬ
 エイサ エイサ サーサ エイサ
 親の御菩提を祈る子は
 井戸を掘っては 水ゆたか
 エイサ エイサ サーサ エイサ

儀間親方は、上人作詞の「親の御菩提」を琉球方言になおしながら、一節ごとに男衆に教えていった。

初め不揃いだった掛け声と足踏みも、国技の空手で鍛えている男たちはすぐに呼吸をのみ込み、身のこなしは目をみはるほど軽快になってゆく。その勇壮な姿は、南国の琉球人が古くから心に秘めていた激しさを、いっぺんに湧き立たせたような体いっばいの念佛踊りであった。

「これこそ、琉球の男エイサーでございますなあ」

と感に堪えない口調で、儀間親方はひとりつぶやいていた。かくして琉球の地に、袋中上人作詞のエイサーが誕生したのである。⁽³⁹⁾

薩摩の琉球侵攻により仏教が衰退していった中で、19世紀初め頃の通達では、

似念仏之儀従跡々御禁止被仰付置候、然者百姓之儀四季共農業ニ苦勞之躰不便ニ被思召上候、尤七月遊□□□孝行之筋、且農民少隙明之時分、又者年ニ稀成遊事ニ而盆中者御免被下候間、常之支

度より軽少も□□無之、他村江差越或争或盆過候迄戯行、

と記されているが、似念仏（エイサー）は前々から禁止されているが、農民は四季の農業に苦勞していることもあり、まして七月遊びは親孝行にもなるし、それに数少ない農閑期の遊びごとであるから、盆中だけはこれを許可する。装束は華美にならないよう、他村への繰り越しはもちろん、興が過ぎて争いごとを起こさず、さらに盆中のみの挙行とする。⁽³⁸⁾とし、民衆に広く伝わっていた念仏を、薩摩も全面的に禁止することができなかった。

このようにエイサーは、民衆にとっては唯一、薩摩による琉球侵略が行われていた中で、盆中に行うことができる大事な行事となっていた。またエイサーでは、初めに念仏歌が歌われることが多い。

ちゅんじゅんながり
 仲順流れ

1 七月七夕 中ぬ十日

エイサー エイサー
 ヒヤルガ エイサー
 スリサーサー スリ

二歳達が するとてい 踊ゆたん

2 仲順流りや 七流り

黄金の はやしん 七はやし

3 仲順大主や 果報な者

産し子 三人 産し生じゃら

4 産し子ぬ 心や 今や知らん

今日の 吉かる日に 勝る日に

5 父御の 遺言や 山高く

母御の 遺言や 海深く

6 生まれてい 五歳にや母戻ち

七歳ぬ年にや 覚び出じゃち

7 国々様々 巡たんてん

我親に似る人 一人居らん

これは現在のエイサーで歌われている歌であるが、念仏歌は、時代の変化とともに農作物の豊穰を願う歌や、恋歌などが歌われるようになった。鎮護国家にすぎなかった仏教であったが、浄土宗は袋中上人によって誰でも特別な修行なしにただ

念仏を一節に唱えることによって救われるという教で、民衆にとって身近な仏教となっていた。

また、それが習俗として村落社会に定着し、現在でもエイサーという伝統文化として存在している。

まとめ

琉球という国は、中国や朝鮮、日本など様々な国と交流しながら独自の文化を生み出してきた。様々なもの、文化が伝わった中で、仏教もその一つである。

鎮護国家のための仏教、薩摩による琉球侵攻などで、現在ではその思想があまり残っていないが、「琉球」という独立し、独自の文化をもつ国では、琉球侵攻が起らなかったとしても、エイサーが時代の変化を受け、独自の文化として成立している点を見ると、仏教というものも、琉球独自の発展を遂げていたのではないかと感じた。

注

- (1) 三隅治雄『原日本・沖縄の民俗と芸能史』沖縄タイムス社 2011, 10, 31 p57、61
- (2) おおきこうよう・田名真之『沖縄 琉球王国ぶらぶら散歩』株式会社新潮社 2009, 3, 25
- (3) 同上
- (4) 諸見友重 訳『訳注 中山世鑑』(有)榕樹書林 2011, 5, 20 「琉球開闢之事」
- (5) 外間守善 校注『おもしろそうし 日本思想体系 18』株式会社岩波書店 1972, 12, 23 「第十 ありきゑとのおもしろ御さうし」
- (6) 中山世鑑
- (7) 外間守善・波照間永吉『定本 琉球国由来記』株式会社角川書店 1997, 4, 1 「巻十 琉球国諸寺旧記序」
- (8) 知名定寛『沖縄宗教史の研究』榕樹書林 1994, 11, 30 p208
- (9) 外間守善・波照間永吉『定本 琉球国由来記』株式会社角川書店 1997, 4, 1 「巻十 天徳山龍福寺記」
- (10) 池宮正治『喜安日記』榕樹書林 2009, 4, 28 p24-25
- (11) 外間守善・波照間永吉『定本 琉球国由来記』株式会社角川書店 1997, 4, 1 「巻十 天徳山龍福寺記」
- (12) 外間守善・波照間永吉『定本 琉球国由来記』株式会社角川書店 1997, 4, 1 「巻一 玉城之事 彼岸」
- (13) 外間守善・波照間永吉『定本 琉球国由来記』株式会社角川書店 1997, 4, 1 「巻一 玉城之事 三月」
- (14) 外間守善・波照間永吉『定本 琉球国由来記』株式会社角川書店 1997, 4, 1 「巻一 玉城之事 七月」
- (15) 外間守善・波照間永吉『定本 琉球国由来記』株式会社角川書店 1997, 4, 1 「巻一 玉城之事 御施餓鬼之事」
- (16) 外間守善・波照間永吉『定本 琉球国由来記』株式会社角川書店 1997, 4, 1 「巻一 玉城之事 忌日」
- (17) 外間守善・波照間永吉『定本 琉球国由来記』株式会社角川書店 1997, 4, 1 「巻一 玉城之事 普天間御参詣」
- (18) 高埜利彦・安田次郎『新体系日本史 15 宗教社会史』株式会社山川出版社 2012, 2, 25 p158
- (19) 高良倉吉『琉球の時代 大いなる歴史像を求めて』株式会社筑摩書房 2012, 3, 10 p112
- (20) 高良倉吉『琉球の時代 大いなる歴史像を求めて』株式会社筑摩書房 2012, 3, 10 p132-133
- (21) 知名定寛『沖縄宗教史の研究』榕樹書林 1994, 11, 30 p221
- (22) 奥村幸巳『沖縄民俗 (第 18 号)』民俗研究クラブ 1970, 10, 20 p52
- (23) 奥村幸巳『沖縄民俗 (第 18 号)』民俗研究クラブ 1970, 10, 20 p91
- (24) 琉球大学社会人類学研究所『白保 (八重山白保村落調査報告)』根元書房 昭和 52 年 6 月 30 日 p111
- (25) 知名定寛『沖縄宗教史の研究』榕樹書林 1994, 11, 30 p224-225
- (26) 新城俊明・栗国恭子 執筆『うちな一観光教本』株式会社城野印刷所 2008, 3, 31 p105
- (27) 知名定寛『沖縄宗教史の研究』榕樹書林 1994,

- 11, 30 p232
- (28) 山下文武『琉球軍記 薩琉軍談』株式会社南方新社 2007, 6, 25 「鳴津義弘琉球征伐之事」
- (29) 仲村清司『本音で語る沖縄史』株式会社新潮社 2011, 6, 25 p126
- (30) 仲村清司『本音で語る沖縄史』株式会社新潮社 2011, 6, 25 p128
- (31) 高良倉吉『琉球の時代 大いなる歴史像を求めて』株式会社筑摩書房 2012, 3, 10 p282
- (32) 上原兼善『島津氏の琉球侵略 - もう一つの慶長の役-』(有) 榕樹書林 2009, 4, 10 p214-215
- (33) 安里進・高良倉吉・田名真之、豊見山和行・西里喜行・真栄平房昭『沖縄県の歴史 県史47』株式会社山川出版社 2004, 8, 5 p183
- (34) 外間守善・波照間永吉『定本 琉球国由来記』株式会社角川書店 1997, 4, 1 「巻四 念仏」
- (35) 『エイサー』沖縄県文化環境部文化国際局文化振興課 1998 p14
- (36) 知名定寛『沖縄宗教史の研究』榕樹書林 1994, 11, 30 p254
- (37) 御代英資『沖縄エイサー誕生ばなし - 袋中という坊さまの生涯-』東洋出版株式会社 2008, 3, 17 p82-94
- (38) 知名定寛『沖縄宗教史の研究』榕樹書林 1994, 11, 30 p275-276
- 図① 上里隆史『誰も見たことのない琉球』(有) ボーダーライン 2008, 6, 30 p50
その他写真 田仲撮影

参考文献

- 新城俊明『教養講座 琉球・沖縄史』編集工房東洋企画 2014, 6, 23
- 川上正孝『沖縄は仏教王国だった - 仏教はなぜ定着しなかったのか』新星出版株式会社 2017, 9, 7
- 比嘉朝進『沖縄拝所巡り 300』那覇出版株社 2005, 6, 21
- 外間守善・桑原重美『沖縄の祖神アマミク』築地書館株式会社 1990, 10, 1

沖縄市企画部平和文化振興課『エイサー 360°
—歴史と現在—』那覇出版社 1998, 3, 31